

22) 英語圏における初期歯科医学書発達史に関する考察 (その3)

Garrison-Morton の Medical Bibliography 1—5 版における歯科医学史書の取扱の変化

A Consideration on the Development of Early Books on Dentistry in the English Speaking Sphere (Part 3) The Change of the Treatment by Garrison-Morton's Medical Bibliography 1—5 Edition, Especially on the Books of History of Dentistry

東京歯科大学 森山 徳長

Norinaga Moriyama, Tokyo Dental College

本書初版 (1943), 2 版 (1954), 3 版 (1970), 4 版 (1981), 5 版 (1991) における歯科医学書 (単行本および雑誌投稿論文合計) 採取数の推移は——初—19, 2—25, 3—27, 4—27, 5—50 編であった。

次に書誌学・歴史書採取数は——初—7, 2—13, 3—13, 4—15, 5—26 編である。

その内訳を順序を追って詳記する。初版では,

- 1 Guerini (Vincenzo) 1909
- 2 Proskauer (Curt) 3 Pts. 1913-20
- 3 Sudhoff (K. F. J.) 1921
- 4 Index of the Periodical Dental Literature 1923—継続発行
- 5 Weinberger (B. W.) 2 Pts. (Orthod.) 1926
- 6 Lufkin (A. W.) 1936
- 7 Bremner (M. D. K.) 1939

であり, 集計すると英国—0, 米国—5, その他・独—2 計 7 編である。

第 2 版では Bremner の The Story of Dentistry が除かれ, 新たに次の 7 編が加えられた。

- 1 Hill (Alfred) 1877
- 2 Crowley (C. Georg.) 1885
- 3 Strömngren 1935 (Denmark)
- 4 Strömngren 1945
- 5 Weinberger 2 Vol. 1948
- 6 Campbell (J. Menz.) 1949
- 7 Colyer (Sir Frank) 1952

集計すると, 英国—3, 米国—6, 独—2, デンマーク—2 の計 13 編である。

第 3 版では, 全部 2 版と同じで 13 編である。

第 4 版は, 1—13 迄は 2・3 版と同じで, 次の 2 編が新たに加えられた。

- 1 Dechaume (Michel) 1977
- 2 Hoffmann-Axthelm 1981

従って集計すると, 英国—3, 米国—6, 独—3, デンマーク—2, 佛—1 の計 15 編である。

第 5 版では 2・3 版の 13 と 4 版の 2 編追加の計 15 編は同じで, それに以下の 11 編が追加された。

- 1 David (Théophile) 1889
- 2 Weinberger 1932
- 3 Poletti 1935 (イタリア)
- 4 Fastlicht (S.) 1954 (メキシコ)
- 5 Proskauer & Witt 1962
- 6 Guliett 1971 (カナダ)
- 7 Asbell (M. B.) 1973
- 8 Fastlicht (S.) 1976 (メキシコ)
- 9 Nakahara (Sen) 1980 (日本)
- 10 Ring (Malvin E.) 1985
- 11 Bennion (Eliz.) 1986

国別集計では, 英国—4, 米国—9, その他・独—4, 佛—2, デンマーク—2, メキシコ—2, 日本・伊・カナダ各 1 の計 26 編となった。

23) 国際歯科学士会の歴史的研究 (その2)

戦後日本における ICD 活動の復活

A Study on the History of International College of Dentists (Part 2)
Revival of the ICD Activity in Post-War Japan

東京歯科大学 ○森山 徳長
高添 一郎
長谷川正康
石川 達也

Norinaga Moriyama, Ichiro Takazoe,
Masayasu Hasegawa and Tatsuya Ishikawa,
Tokyo Dental College

戦後の日本で ICD の活動の始まったのは, 山内竜太郎を嚆矢とする。1956 (昭和 31) 年山内は米国ミネソタの ICD 本部を訪れ, 戦後のフェロー第 1 号となった。

翌年 ADA 次期会長 Alstadt が来日、山内は公式通訳となり、Alstadt が ICD 役員であったことから日本でのリバイバルが始った。山内は松宮誠一、中原実、永井一夫、田高善七、佐藤文悟らと語り合い5月から毎月会合して案を練り、9月よりは福島秀策、原田良種、大井清、新国俊彦、河辺清治ほかも参加し、この年度17名がフェローとなった。福島秀策を会長に撰出し、この年を日本部会では発足の年としている。

1958 年にも14名が加り、日本部会は再建の目度があった、1959 年4月18日、本部次期会長 Agnew が来日、日本部会総会・認証式に出席し、日本部会は公式に ICD 第25地区として公認された。この時認証状を伝達されたのは米沢和一、鈴木鶴子、亀沢シズエ、有田正俊らであった。

初代会長福島秀策 1957—60, 2代原田良種 1961—62, 3代鈴木勝 63—64, 4代大井清 65—66, 5代新国俊彦 67—68, 第6代河辺清治 69—71 とバトタッチしつつ、成長を続けた。

1969 年秋 ADA 110 年祭参加のためニューヨークに行った河辺会長、村瀬正雄、佐藤文悟らは、ICD 国際理事会、米国本部総会に出席した。この時、会員数102名の日本部会は正式に自治権を持つ Autonomous section No. 6 として認証され、河辺は国際理事に任命された。

日本部会は1970 年より日本部会雑誌を発行し始め、本部よりの visiting scholar として Beverly Hill で開業していた審美歯科学の草分け的第一人者 Charles Pincus を迎えて公開講演会を開いたり、学術的活動も盛んに行うようになった。この時森山が通訳に当たった。

この頃より ICD 日本部会は発展期に入り、シカゴの midwinter scientific meeting にならった冬期学会を毎年2月に開催するようになった。

5月総会・認証式、12月年末集会、2月冬期学会の3大行事を定期的に行い、今年1998 年5月には第20代会長西連寺愛憲が就任した。

会員数は1980 年300 名、1990 年400 名を数えており、国際理事2名の枠を有して第4位の自治部会に発展している。

24) 1848 年刊 John Tomes 著 Dental Physiology and Surgery の書誌学的研究

Bibliographical Studies on “Dental Physiology and Surgery” by John Tomes
Published in 1848

東京歯科大学 森山 徳長
○春日 芳彦
塩津 二郎
本間 孝

Norinaga Moriyama, Yoshihiko Kasuga, Jiro Shiozu and Takashi Honma, Tokyo Dental College

目次に依り内容の概要を述べ、一部をスライドで提示した。

本書は明治23—25 年にムック形式で24 回にわたって刊行された高山歯科医学院講義録に、『歯科生理学及外科学』として完訳されている。

例えば、目次 第一編 総論 歯牙一般の性質 歯と骨との関係 骨歯及爪歯 (Osseous and Cuticular Teeth) 歯の形状及其実用上における分類 歯の模形的形状 人類歯牙の特質 切歯、犬歯、小臼歯、大臼歯の説明 ……………1 頁

第二編 諸歯相互及上下の関係 歯槽 神経血管 乳歯 咬合 咀嚼 歯の構造 ……………28

第三編 管間組織 牙質の脈管 歯髓石灰化茜草の牙質への効果 歯の化学分析 珐瑯質・白亜質の構造 ……………67

第四編 有核細胞の分化 歯乳頭の分化 出齦の三段階 ……………99

第五編 象牙髓の発展と象牙質の完成 珐瑯髓の発展と珐瑯質形成 白亜髓と白亜質形成 …124

第六編 乳歯の萌生 顎骨の成長 永久歯の萌生 7—13 歳児は歯で年齢計算が可能 第三生歯 過剰歯 黄疽歯 音声と歯牙口蓋形態 ……………174

第七編 乳歯出齦の異常 乳歯萌出時期の疾患 (炎症及硬結) 出齦後の疾患 ……………208

第八編 第二生歯 (永久歯) の異常 歯列異常 永久歯の排列異常 下顎前突 ……………236

第九編 歯牙相互の骨質結合 歯牙外傷 歯髓への損傷 再癒着 脱臼 歯槽骨折 ……………295

第十編 歯組織の疾患 齲蝕 (歯骨傷) の原因